

アーリヤ人がインダス河上流域に入り、さらに生活領域を東方へ拡大して定住性をいつそう強める中で、目的・役割・場面に応じ、また慣習や伝統に従って、多様であった各種の祭式・儀礼と、それらを職業的に担当するに至っていた様々な祭官家系群とは、次第に統括的枠組みの中に組織化されていったと思われる。その結果まず確立したのがシユラウタ祭式と呼ばれる祭式群である（意味は「天啓（文献）に関する」。彼らが携えていた言語文化（祭式用の詩句など）もこの枠組みの下に整理・編入され、「ヴェーダ文献群」の中にまとめられた。「ヴェーダ」はもともと「知識」を意味する。シユラウタ祭式は人々を包んでいる「世界」（マクロコスモス）や共同体、首長（王）などに関わる大規模な祭式である。実際に供物を取り扱うのはアドヴァリユという祭官職であるが（原義は「祭式の」道筋・進行を掌る）、彼らが、行作や使用する器具などに意義や効力を賦与する目的で、一つ一つの行作に伴って唱える短い文句（ヤジュス「祭詞・祭呪」）は「ヤジュルヴェーダ・サンヒター」（ヤジュルヴェーダ本集）という文献の中に編集された。ヤジュスの中にも古い要素が指摘されうるが、言語発展の段階からは総じて「リグヴェーダ」よりも新しく、その編集も「リグヴェーダ」の編集完了以後である。「ヤジュルヴェーダ・サンヒター」の中にはさらに散文部分（紀元前八〇〇年前後から成立か）が併せて編集されており、これに遅れて成立した、各祭官字派にわたって存在する「ブラーフマナ」という名を冠する散文文献群とともに、シユラウタ祭式をめぐる議論・根拠付けを内容とする。（両散文文献群を合わせてやはり「ブラーフマナ」と総称する。）この散文の価値はインド最古の普通の文章語を示す、

というにとどまらない。年代的にはギリシアに散文作品が現われるよりも古く、ほぼホメーロスの叙事詩成立の時代に相当し、部分的にはさらにいくらか遡るであろう。特殊な記録類を別にすれば、純度の高いインド・ヨーロッパ語で書かれた、まとまりのある普通の散文の最古の例とすることができ、言語や文体研究の上でも、内容の面でも、重要な資料である。

祭司階級はこの時代までに、社会的地位と職能の重要性を確立していた。少なくとも「リグヴェーダ」の段階では、神々や神々の行為が力を持ち、それに語りかけ働きかける能力のゆえに祭司が重要視されていたと考えられるが、今や祭司の遂行する儀式そのものが世界を維持し、動かす位置にある、あるいは、共同体の中でそうした役割を担っており、神々はいわば儀式の一構成要素というべき位置に後退している。(もともと我々は儀式専門家自身の遺した文献以外に何らの判断材料も持っていないのではあるが。)

これら「ブラーフマナ」の究極的課題は儀式を構成する個々の手続きや詩句が正しく遂行・適用され、儀式が目的実現の力をもった完全なものとなるよう、検証・確認することである。それは彼らの職業基盤(共同体に対して負う役割)そのものの保証でもある。そのために、行作や詩句(マントラ)の適用次第が述べられ、その正当性(実現力・効力)が「論証」される。論証のためには神話的因縁譚(宇宙開闢とその中心となる神ブラジャーパティ「子孫の主」の話、神々とアスラたちの戦いと神々の勝利した次第・戦略、事物の由来など)が引かれ、日常目にする諸現象がそうあり、そう呼ばれる理由がこれに結合される。祭司

の、正しい知識に基づいた正しい所作があるために宇宙や現象界の諸事が正しく維持されている、と明言される箇所もある。時には、選択肢を挙げて正しい見解を採って根拠を挙げたり、古今の神学者（祭祀に関する権威、学匠）の説や複数の神学者の討論・対決、他学派の説の否定が見られる。ここにインドの思惟の最初の具体的表現がまとまった形で存在する。

「論理」の大きな特色として、二つの事物・事象の間に存在する何らかの共通点を抽象し、それを媒介項として両者を結び付ける結合・同置の原理が挙げられる。これに基づいて祭祀中のある行作・事物が現象世界のある事物・現象と結合・同置され、祭官は祭祀という操作盤を操作することによって世界・万象を操るのである。このような媒介項の発見をめぐる精神的営為がさらに推し進められると、そして結び付けられる両者の一方が原理的なレヴェルのものに、一方が現象界の事柄へと、いつそう明瞭に配分されていく時、さらにその原理的なものへの関心が宇宙原理の追求としての性格をより強めていけば、既にウパニシャッドの世界に至る。また、重要な原理の一つに「知っていること」のもつ力がある。祭祀を構成する行作や詩句の意味・根拠を「知って」行なうことが不可欠の要件であり、それも確信する者だけがもつ、念力に近い知のエネルギーが必要とされているように思われる。（精神・思考・意志のもつ力は元来「クラトウ」と呼ばれた。）ブラーフマナ文献の持つこの性格は「……と知っている者は……を得る」という結びの文の頻度の高まりとともに、ここでもウパニシャッドの入り口になっている。

内容に比較的まとまりのある短い話で、文献の性格がいくらか窺えるものを選んだ。平
行伝承がある場合も特に断らない。1-3は「ヤジュールヴェーダ・サンヒター」の散文部
分から、4は「サーマヴェーダ」の学派に属するブラーフマナから採った。

1 アグニの密通

祭式で火を鑽り出す際に使われる、孔のついた台がシャミーという木から、その上にはめ込まれて回転・摩擦される棒状の部分がアシュヴァッタ（インドボダイジュ）から作られる由縁を述べたもの。後世の法典類で大罪の一つに挙げられる、師匠の妻と関係を持つこと（グルダーラガマナ「師匠の妻のもとへ行くこと」、グルタルバガ「師匠のベッドに行く者」の具体例を示す古い出典箇所として興味深い。この時代の散文は主語が明示されることが少ないので解釈は必ずしも一義的でない。

底本には次のものを用いた。

Leopold von Schroeder ed., *Maitrayani Samhita*. Bd. I. Leipzig: F. A. Brockhaus, 1881.

アグニ（火神）は、ヴァルウナが旅に出ている間に、彼のところへ修行にや^①つて来たのだった。「アグニは」彼の妻とひとつになった。彼（ヴァルウナ）が東からや^②つて来るのを見つけて、「アグニは」西へ逃げ去った。だが彼（アグニ）は気づいた、「ヴァルウナが」精液を（彼女の胎内から）むしり取り、「その後で」全ての生命力、雄々しさを奪い去るぞ」と。そこで「アグニは」そこへ向かつて身^③を乗りだし、「自分で」むしり取った。精液であったもの、それは寄生木であるアシュヴァッタ^④になった。胎膜（であった）もの、それはシャミー（の木）に。それゆえ、これら両者は祭式の場合に登場する。良き生まれをもつから。

① プラフマチャリヤ「梵行」。師匠に弟子入りしてヴェーダを学習すること。

(2) インドボダイジュ。イチジク属の高木で、他の樹木の樹上に芽生え、そこから根を下ろし、やがて成長してもとの樹木全体を包み込む「絞め殺しの木」の性質をもつ。ここではシャミー（おそらくアカシアの仲間の高木）に付着・寄生したそれが想定されているのであろう。

2 戦車競走

ヴァーマデーヴァは「リグヴェーダ」第四巻に収められた詩を作り、伝えたりし。名の意味は祭司にふさわしく「好ましい神をもつた」である。ここでは、彼に帰せられる第四巻第四歌（全一五詩節）がある祭式中に用いられる理由が、因縁譚として語られる。

底本には次のものを用いた。

Leopold von Schroeder ed., *Kaṭhakaṁ. Die Samhitā der Kātha-Gāthā*. Bd. I. Leipzig: F. A. Brockhaus, 1900.

ヴァーマデーヴァの、一五〔詩節〕からなる、危害を加える諸力を打破〔する歌〕¹が、この場合、祭火に薪を投ずる時の詩節²として用いられる。ヴァーマデーヴァとクスイダーイー（女性の名）とは自身（つまり命）を賭けて戦車競走をしたのであった。クスイダーイーは、追いついて先にたつた彼の〔車の〕手すりを（車を当てる）壊した。彼女は二度目に〔車の〕向きを変えて近づいた、「轆か、車軸でも折ってやろう」と〔考えながら〕。かのヴァーマデーヴァは火壺に入れた火を持っていた。

1 本乃の正確には
轆(あ)し

移動の途上で異部族(とこの悪い神、魔女?)に出会い、戦車競走
に於て勝負をつけようとしたものか。部族の火(いかに早く Vasishtham,
cf. SB Agni 1.1.1)は移動時には部族長または筆頭祭官が
戦車にのり、彼らにのみて運んだ。cf. MS 2.0 場印の44p
テリトリイ争い

→ Frazer, Golden Bough 863
(Vp. 19 in Jap. ed.)

〔彼は〕その火に目を落とした。彼は「おまえ（火）は（おまえの）最前面を幅広い（左右に展開した）突撃のようにせよ」〔で始まる〕この歌（スークタ）を見た（観得した）。（すると）彼女に、火は追いかかって、焼き尽くした。彼女は焼かれながらクスイダの池に潜り込んだ。この歌が伴唱されるのは危害を加える諸力を滅ぼすためである。

（1）「危害を加える（諸）力」（毀損力）と訳したのはラクシヤスという中性の名詞。擬人的にとらえられる場合もあり、仏教においては「羅刹」となった。

（2）アドヴァリユ祭官が祭火に薪を投ずる際、ホートリが背後に立って唱える「リグヴェーダ」からとられた詩節。

（3）現実にあつた池の名の由来を述べている。クスイダーイー「クスイダの娘」が潜ったから。

3 呪法の起源

二つの呪法の起源を説く。「マハーバーラタ」の一挿話（九・四〇）の基になっている話である。底本は前節と同じである。

ナイミシヤ（の森）の住人たちがサットラ¹を行なっていた。彼らは（サットラを終えて）立ち上がり、クル・パンチャラーの人々のもとで二七頭の若牛を手に入れた。ダルバの末裔、バカ²が言った、

「これらをおまえたちだけで分配しろ。私はこの（近くにいる）ヴィチトラヴィーリヤの子、ドゥリタラーシュトラのところへ行くこうと思う。彼が私に家を用意してくれるだろう」と。「バカは」彼のところへやつて来た。「ドゥリタラーシュトラ王は」彼の面倒をみなかった。彼を追い払った。「出自だけの婆羅門よ」、「王は」言った、「家畜たちの主（ルドラ神）が打ち殺すこれらの牝牛たちを、先々自分のために調理しながらさすらえ」と。「バカは」「デーヴァ・スーが私に王の食物を（王を介して）おくつてよこさせたのだ」と（考えて）、それらの（牛の）腿を切りとつては自分のために調理した。彼が調理をしていると、消え失せた。彼は「ルドラを伴ったアグニ」に八皿分の（供物用焼き菓子）を準備して捧げた、黒い米であった。夜が明けると、かのドゥリタラーシュトラのものであったものは全て、ばらばらになり、四散していた。それら（の牛たち）を探索官たちが見つつけ出した。「彼らは王に言った、」例の婆羅門が君に（これは）呪いをかけているのだ。彼に助けをもとめなさい」と。「王はバカを呼んで」彼に援助を与えた。彼にたくさん施した。彼（バカ）は「芳香あるアグニ」に八皿分（の供物用焼き菓子）を準備して捧げた、白い米であった。すると、それは消え失せたのであった。

(1) 原義は「座ること」。祭司たちだけで行なう長期間のソーマ祭の一種。ここでは異部族の牛の掠奪を目的とした襲撃作戦（「リグヴェーダ」でガヴィシュティ、英語でいうレイド）の風習が背景にあると思われる。

(2) 「……の人々」という表現は部族と同時に「国」を意味する。クル・パンチャラはヤムナー・ガンガー両河の上流域を中心に栄えた、当時の有力な連合部族ないしは連合国。

Rinderraubzug

Notize bei

FALK Brndersch. 59

→ KRICK 498 ^{13 45}

Sarasvatī/sattra
+ Index s.v. Rautpūje,
Rindri

→ Satyakama Jāhala
Sumanā, bēpha

Naimitya- Satrin-

CAH 22, 13

KB XXVI 5

PB XXV 6, 4

Chajū 2

cf. ApSRSu VT 14, 11

Meister 制度

- (3) サットラを行なった婆羅門たちの首領。普通名詞では「青鷲」。父祖名は植物名に基づく。
- (4) 「輝きわたる活力をもった」。
- (5) 王名、「確固たる主権をもつ」。父の名同様、王族らしい名である。
- (6) 病気にかかっており、ルドラ（ヒンドゥー教のシヴァ神の前身）がその原因を作っていることを意味する表現。王はルドラに呪われた病気の牛たちを与えて、門前払いを食わせたのである。
- (7) 家畜たちの主（パシュパティ）、すなわちルドラ神のこと。ルドラのアスペクトの一つであるルドラパシュパティは、王の即位儀礼の際、デーヴァ・スーと呼ばれる即位を承認する諸神格の中に数えられる。ここは、王がルドラのことをパシュパティと呼んだのを、バカが（おそらく王への皮肉をもこめて）受けたもの。「デーヴァ・スー」の語義は「神々に鼓舞・承認された」で、パティ「主」の語が示すように、パシュパティ自身が既に神々によって認可されて王の職にある。即位儀礼の際には、「神々に承認された」神々の中の王たちが地上の王を承認し、「神々に承認された」ものとなす、という構造になっている。
- (8) 火で調理すれば無害であることを見抜いており、ルドラが王の背後で自分のために講じてくれている策であると理解して、一番良い部分を大胆に食べたのであろう。
- (9) 主語は不明。非人称の表現で、背後に「ルドラの呪い」（すなわち病害）が意図されていると解した。
- (10) それぞれ、そういう名のアグニ（火神）またはアグニのアスペクト。
- (11) この呪法と注13の呪法の由来を説くのがこの物語の眼目。ルドラの呪いが消えたので、バカはルドラと調理の火の複合した神格に感謝の献供を捧げたが、その際「黒い」米を原料としたため、呪い（黒魔術）として機能し、ルドラの呪いが転嫁され、王の家畜を四散させた、それがこの呪

Parall. CM 147
 では薬草を煎じて
 rasa-と抽出した
 薬液が述べられて
 いる

4

祭式の治療

法の起源である、と解釈できようか。ここでもロドラが家畜に関わる神格であることが媒介項とな
 っている。テキスト自身は後続の箇所「黒い」理由を暗黒死と同置して説明している。

(12) 王の家畜の牛たち。

(13) この呪法が機能する具体的な構造は不明であるが、呪いを解く方法（「白魔術」）として述べら
 れている。

祭式の執行に過失があった場合、プラーヤシュチティと呼ばれる償い・埋め合わせの儀礼が必要
 となる（普通「贖罪法」と訳される）。ここに訳出するのは、その仕方を根拠づける目的で語られた
 話である。贖罪法を担当するのは、一般に「アタルヴァヴェーダ」を護持するとされるブラフマン祭
 官であるが、この祭官の資格が、ここでは、「アタルヴァヴェーダ」を伝承する家系の者に限らない
 とも解釈される点（最終段落）は注目に値する。そもそも「祭式」が一種の「獣」として思い描か
 れることに対応して（この意味で、「リグヴェーダ」のブルシャ讃歌、本書第一章6、殊に第七節、
 第一六節をも参照されたい）、「贖罪」は「治療」として語られる。第三段に述べられる比喩は「アタ
 ルヴァヴェーダ」の骨折治療の歌（第四卷第一二歌）を想起させるが、ブラフマン祭官（「アタル
 ヴァヴェーダ」）贖罪法という役割配当・結合は、「アタルヴァヴェーダ」から窺えるような祭官の職
 業と治療との本来的な結び付きを根底として、古典的シュラウタ祭式の中に組織化された結果かもし
 れない。この段は、また、祭式の中で積極的役割を果たさないブラフマン祭官と呼ばれる職掌の存在

→ p. 79 注1

AB T 32, 33, 34

J8 I 358 → Parall. ChU IV 17

指揮者・監督

理由に対して、(今日の学者が頭を悩ませることがあるように) 当時の専門家の間にも疑問が起こりえた可能性を示唆する点でも興味深い。各祭官の役割は祭式において詩句を唱えるという面から定義されており、祭官階級の職の本質が「ことば」にあるという、本来の考え方が残っている。(これに關してもプルシャ讃歌の第二節参照。婆羅門はプルシャの口から生まれた。) 婆羅門階級の本質ならびに総称を「ブラフマン」というが(祭官名としてのそれとはアクセント位置のみ異なる)、この語の本来の意味は「正しいことば(の形)がもつ力」である。

底本には次のものを用いた。

Raghu Vira and Lokesh Chandra eds. *Jaiminiya-Brahmana of the Samaveda: Complete text critically edited for the first time* (Sarasvati-Vihara-Series 31). Nagpur, 1954.

かのブラジャーパティ(子孫の主)は、周知のように、祭式を創出してから、「天界のある場所へ」昇っていった。彼は神々に言った、「この三つ一組のヴェーダを用いて君らは祭式を繰り広げよ」と。彼ら神々はこの三つ一組のヴェーダを用いて「自分たちのために」祭式を行ないつつ、(そのことによつて) 罪悪を「自分自身から」叩き落とした。彼らは天界を認識した。^① 彼らは言った、「我々は、今、この三つ一組のヴェーダを用いて(自分たちのために) 祭式を行ないつつ、罪悪を「自分自身から」叩き落としたところだが、「そして」天界を認識したところだが、もし今、我々のこの祭式が、今日、損傷に至ることがあつたら、我々は何を用いてそれを治療しようか」と。彼らにブラジャーパティは言った、「この三つ一組のヴェーダの威光、生命力、活力、精髓であつたところのもの^②、それを私は、ここ、上に(天界に)、皆もたらしたのだ」と、「さらにその」これらヴァーフリティを手渡した^③

ブラーフマナ 54

3 Veda = Śrauta 祭と構成的 Veda

(AV 以外)

がら、「これらを用いて君らはそれを治療するがよい」と。

さてもし祭式がリチュ(讚歌)に関して損傷に至ることがあつたら、君らは「プフース・スヴァーハー」と(唱えて)ガールハパチャ(祭火)に供物を注ぐがよい。それこそがその場合の贖罪法だ。次に、もしヤジュス(祭詞)に関してならば、「プフヴァス・スヴァーハー」と(唱えて)アーグニードラ祭官の(火)に供物を注ぐがよい。それこそがその場合の贖罪法だ。次に、もしサーマン(歌詠)に関してならば、「スヴァス・スヴァーハー」と(唱えて)アーハヴァニーヤ(祭火)に供物を注ぐがよい。それこそがその場合の贖罪法だ。——次に、もし諸々の供物祭・犠牲祭か、新満月祭においてならば、「プフヴァス・スヴァーハー」と(唱えて)アヌヴァーハーリヤパチャナ(祭火)に供物を注ぐがよい。それこそがその場合の贖罪法だ。次に、「これは何から生じたのか」と思い出せない事柄からの(損傷の)場合には、「プフル・プフヴァス・スヴァス・スヴァーハー」と(唱えて)アーハヴァニーヤ(祭火)に供物を注ぐがよい。それこそがすべての贖罪法だ。

それはちように、壊れた箇所があれば人はそれを、節目と節目を接合して、治療することがある。まさしくそのように、このように知っている者はその一切を治療する。次に、ある人(祭主)の(祭式の)贖罪法を、このことを知っていない者が行なう時には、ちように、壊れた箇所と壊れた箇所を接合することがある。あるいは、壊れた箇所の上に毒液を施すことがある。それは(ちように)そのようだ。それゆえ、やはり、このように知る者にのみ贖罪法を行なわせるべきである。

そこで、人々は言う、「リチュ(讚歌)によってホートリ祭官の職が、ヤジュス(祭詞)によってアドヴァリユ祭官の職が、サーマン(歌詠)によって朗詠(つまり、ウドガートリ祭官の職)が行なわれ

丁 手は
脱臼 (cf. vāṣṭā-
cāh 144)

prajñā
→ cf. 二道と見出し 解3
prajñā

śukra-
「精(龍)液」

るのだが、それなら、何によってブラフマン祭官の職は行なわれるのか」と。「この三つ一組の学問
によってである」と言うべきである。だから、その人こそ最も学識がある、と思われるならば、その
人を(自分の祭式の)ブラフマン祭官となすべきである。このように知る者、その者は実にブラフマ
ン祭官である。

- (1) 「見出した」のではなく「認識した」のであるから、空間的には既にその場所にいたことにな
る。
- (2) オク下に述べられるヴァーフリテイのこと。次注参照。
- (3) プフル(またはプフス)、プフアス、スヴァスの三発語(三聖音)。これらが、それぞ
れ、「リグヴェーダ」、「ヤジュルヴェーダ」、「サーマヴェーダ」の精髓として生じた次第が、先行
する章で述べられている。これにスヴァーハーという間投辞を付して贖罪(治療)に用いる。
- (4) この段落は、内容から言っても文体から言っても、ブラジャーパティの発言の続きであるが、
発言を締めくくる語が欠けている。テキストの当該部分が扱うソーマ祭における贖罪法を述べ、更
にそれ以外の祭式にも言及している。
- (5) 祭場内の西側に作られる、円形火壇をもった「家長に属する」祭火。
- (6) 祭場の北隅にある、アーングニードラ祭官(点火官、組織としてはブラフマン祭官のグループ
に属するが実際にはアドヴァリユ祭官の助手)に属する祭火。
- (7) 祭場内の東側に設置される、四角形の火壇をもった「供物の注ぎ込まれるべき」祭火。
- (8) 普通「南の祭火」(タクシナグニ)と呼ばれる、半円形の火壇をもった「穀物祭で祭官に
ふるまわれるべき(米料理)を調理する」祭火。
- (9) 骨折のことをいうものと解される。

「報酬の火」とも解釈される。

「アーン」と

〜 Agnihotra

